

「学都仙台」——その"学都"観をさぐる——（その4）

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-05-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中川, 正人 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24837">https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24837</a>

# 「学都仙台」——その「学都」観をさぐる——（その四）

中川 正人

## 八、昭和前期の「学都」観（一）

(一) 「東北の学都仙台」から「学都仙台」へ

昭和前期の「学都」の呼称

昭和前期（戦前・戦中）の仙台において、「学都」の呼称を市内の一般市民がどのように捉えていたか、確認できる具体的な資料を示すことは難しい。それを探る資料の一部を探し出し、提示・検討してみる。

イ、『河北新報』記事にみる「学都」

昭和前期に入ると、『河北新報』紙面上で、「学都」を使用する頻度は増加する。記事（小見出しと記事の一部）の具体例を示し、その「学都」観を探ってみる（引用資料は旧字体の一部を当用漢字体で表記。傍線・ゴシック体は筆者。「杜（森）の都」「軍都」の文言は、一部を除き基本的に引用していない）。

一九二七年（昭和二）から一九四一年（昭和一六）の小見出し記

事を『河北ライブラリー』<sup>(註1)</sup>で検索し、その一部を列挙すると、

昭和二年「学都の学校巡り」「学都の不名誉」「学都として必要な学生の寄宿舎」

昭和三年「学都の当市に大野球場」「学都の称ある実には茲に胚

芽

昭和四年「学都仙台の面目維持 生まれる校外組合」

昭和六年「学都仙台への希望」「学都仙台を飾る美術展」「女専を廃してこそ学都の面目が立つ」「杜の都仙台は学

都

昭和八年「史学界の権威一堂に会す 学都の秋に相応しき催

し」

昭和九年「仙台は立派な学都」「学都仙台の風紀」「仙台署、学都の面目考慮」

昭和十一年「真の学都」「仙台は成る程、学都」

昭和十二年「学都を賑はす」

昭和十三年「我国唯一の液体ヘリウム研究室（帝大金属材料研究所）氷点下二百六十九度 液体ヘリウムの研究が涼

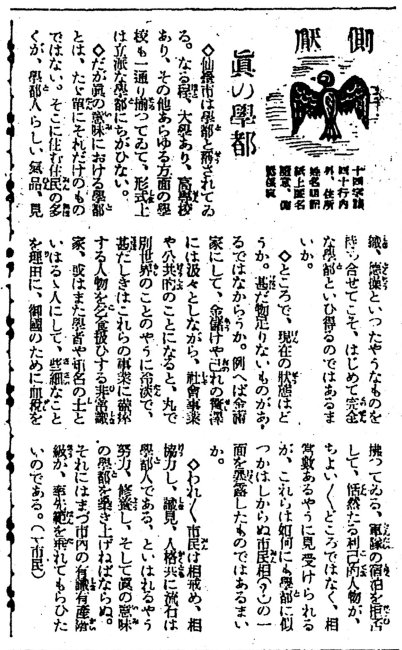
風を一杯に孕んで学都仙台の夏空に颯爽と登場

昭和一四年「学都の三つの便り」

昭和一五年「府県めぐり 宮城県巻の巻 学都と大陸発展」

昭和一六年「学校報国学都仙台結成準備」 「東亜史学大会 学都

仙台で」



(写真8)

『河北新報』記載「真の学都（投書）」

具体的な記事内容で確認すると、

①「県立学校の寄宿舎は男女師範学校を除いては全部廃止となり

(中略) 今後ますます学生数を増加すべき仙台としては、学都

の名声を維持し且向上せしめんとするにはどうしてもこの種の

事業に投資するの篤志者が現れねばならぬと力説する向が少な

くない」(昭和二・四・一)

②「現今は最高学府たる帝国大学を始めあらゆる教育機関の具わつてゐること全国稀れに見る所で学都の称ある実に茲に胚胎したものである」(昭和三・四・四)

③「学都仙台の風紀が最近著しく弛緩し、学生の無銭飲食や泥酔暴行沙汰が頻りに行はれ警察の厄介になるものが噴出してゐるのに痛く憤慨して、学都浄化の使命を帯びた全市校外組合なるものが特設されることになつた。下は小学校から大学に至る過程の各種男子学生の郊外監督に任じ学都の面目を維持しようと言ふので設置委員に東二・東六・片平・宮城野・長町の各小学校が挙げられてゐる」(昭和四・一一・二〇)

④「杜の都仙台は学都と云はれてゐる程学校が多く学生が多い、学生の町であると同時に又仙台が月給取りの町でもある」(昭和六・七・二二)

⑤「仙台市は学都と称されてゐる。なる程、大学あり、高専校あり、その他あらゆる方面の学校も一通り揃つてゐて、形式上は立派な学都にちがひない。だが眞の意味における学都とは、ただ単にそれだけのものではない。(中略) われく市民は相戒め、相協力し、識見、人格共に流石は学都人である、といはれるやう努力、修養し、そして眞の意味の学都を築き上げねばならぬ(側厭)」(昭和一一・一一・一六)

上記の特徴を挙げると、④大正期のように、「学都」に関する明確な提言・論議の交流は確認できない。⑤また、小見出しや文中に

ある「学都」の定義づけは、明確とはいえない。①「あらゆる教育機関が備わつてゐること全国稀に見る所」「学校・学生が多い、学生町の町」の記述では、「学生」を「下は小学校から大学に至る過程の各種学生」と捉える論者が多い点は注目でき、「学都」の代表的な捉え方（定義づけ）である。また、仙台を「学都の称ある実に茲に胚芽したもの」であると明記しているが、仙台は「全国稀に見る所」であるが、「（全国）唯一の学都」とは見えていない。②「学都仙台」と「東北の学都」の文言がともに一つの論述の中で、使用される事例が多く見られるようになる。一九二九年（昭和四）以降は、東北抜き「学都」「学都仙台」と表示する傾向が現れ始め、とくに渋谷徳三郎市政期（後述）に入ると、「学都仙台」の使用が増えてくる。③しかし、「学都」と「学都仙台」には明確な区別はなく、両者に「東北地方にあつて唯一の学都」の意味づけがあり、「学都の面目」「学都の不名誉」が使用された意図も当然含まれている。④「杜の都仙台は学都と云はれてゐる」の文言のように、この時期には、「学都」が「杜の都仙台」の別称として認知されていたことは疑いない。⑤とくに、投書欄（側歴）<sup>（非3）</sup>で一市民が「真の学都」の意味について問いかけている点は見逃せない。

#### 口、教育雑誌・その他の市民向け出版物にみる「学都」

つぎに、仙台市内で発行されていた教育雑誌や市民向け出版物（啓蒙書・観光案内書）<sup>（非4）</sup>が、「学都」をどのように論述していたかを示そう。

①『仙臺遊覧の枝折』（東北産業博覧会・小山源蔵編 昭和三）

「仙台市は森の都として知られ学都として知られている。両者とも人類の文化生活に必要な価値をそれぞれ表徴するものがあるが、前者が今後或る程度まで切り詰めらるべき余儀なさを持つに反し、後者は今後益々発展せしめらるべき当然性と可能性とを無制限に持つてゐる。（中略）従つて我が仙台市が果して真の意味の学都であるや否やを判定する有力なる標準は仙台人が一般教育なるものに対して如何なる種類の理解と如何なる程度の熱とを所有するかにある」

②『右尚会雑誌 第四十六號』（竹浪友治郎「県初等教育に就いて」 昭和七）

「由來東北文化の一中心地として政治経済文化軍事上重要な位置を占むる学都仙台をめぐる県初等教育の實際は、其藩学的傳統を尊重して極めて堅実穩健である」

③『宮城縣郷土誌』（菊地勝之助著 初等教育学会編 学習社 昭和七）

「仙台市はまだ商工業都市といふことは出来ないが、我が国に於ける有数な教育都市であり、政治及び軍事の中心都市である。東北帝国大学・第二高等学校・高等工業学校などの官立学校を始めとし、女子専門学校・男女師範学校・中学校・高等女学校及び各種実業学校其の他専門学校並に中等学校程度の私立諸学校が設置されてゐる。なほ市内には数多くの小学校や幼稚園が完備してゐる。ここに学ぶ男女児童・生徒及び学生の総数

は、実に四万人余に達し、仙台市総人口の約五分の一以上に達してゐる。仙台市が東北地方の学都と称せられるのも決して過言ではない」

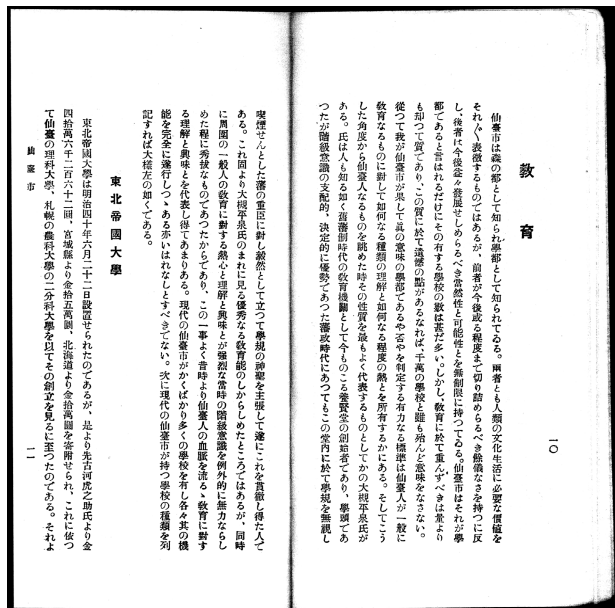
- ④『宮城縣案内』（港湾協会第六回通常総会宮城準備委員会 昭和八）

「殊に本市は東北の学都と称せらるゝ如く教育機関の整備しあることは其の誇りである。即ち最高学府たる東北帝国大学を始め第二高等学校、仙台高等工業学校、宮城県立女子専門学校、東北学院高等部がある。その他中学校、高等女学校、実業学校等の公私立各種学校を網羅し文教の旺なること東北教育界に異彩を放つてゐる（中略）現在学都としての仙台には各種の教育機関が完備し、加之氣候風土並に民情等が子弟教育に適するので仙台市民は固より本県民が少からず是等文化の恩恵を蒙てゐる。のみならず全国各地から此所に笈を負ふものが逐年多きを加へてをる」

- ⑤『仙山線全通記念 仙山案内』（交通案内社・仙台 昭和一一）  
「東北第一の都会である。現在の仙台は東北地方の中心として軍隊官衙、会社が設けられ殊に教育機関の完備せるは其の誇りとする所で学都と称せられて居る。近年、消費都市から生産都市に移らんとする趨勢にある」

- ⑥『躍進宮城の教育界（第貳輯）』（土橋信一 産業時報社 昭和一一）  
「現在名実共に学都の面目を保つに至つた。（中略）学都仙

台市は渋谷市長就任以来市の教育方面は着々整備の域に進みつつあり、特に教育五ヶ年計画を樹立し（中略）これが内容充実に教育研究所を新設した。当研究所は欧米教育調査局の如く科学的研究により学校教育、社会教育を解決せんとし、特に郷土生活、国家生活の様式傾向を研究して、之に適應する教育方案を樹立する最も新しい施設である。特に研究の対象は我が仙台市の政治、経済、社会生活であつて之を科学的に研究し応用すべきである」



(写真9)

『仙臺遊覧の枝折』「教育」の記述（仙台市は森の都・学都）



⑦『宮城縣郷土讀本』（宮城県教育會編 日・月之卷 社会教育協會 昭和一二）

「教育の完備してゐる事は全国中でも比類少く、これ等の諸学校に学ぶ生徒・学生の総数は四万余人に達し、市の総人口の五分の一を占めてゐる。仙台市が学都と称せられる所以もここにあり」（日之卷）、「産業經濟上から眺めると、他の大都市に比較して著しく遜色がある。産業都市としての面目がない。学都仙台には最高学府たる東北帝国大学を始め第二高等学校・仙台高等工業学校・東北学院高等専門部・宮城県立女子専門学校等の各種専門教育機関が完備して全国に稀に見る現象を呈してゐる」（月之卷）

資料①は、東北産業博覽會参加者向けの觀光案内書である。東北各地からの来仙者に、「学都」「森（杜）の都」の呼称が仙台を意味することを認知させ、さらに、仙台が果たして「真の意味の学都であるか」と問い、「学都」であるための「判定の基準は仙台市が一般教育に対して理解と熱を所有するか」にあることも論じている。また、仙台の特性である「森（杜）の都」と「学都」を比較して、「前者が今後或る程度まで切り詰めらるべき余儀なきを持つに反し、後者は今後益々發展せしめらるべき当然性と可能性とを無限に持つてゐる」と指摘している点は、興味深い。資料②は、「東北の学都」として存在する仙台を「学都仙台」であると表記し、「学都をめぐる県初等教育」の存在についても述べている。資料③は、郷

土道家菊地勝之助の記述である。仙台を「まだ商工業都市とはいえない」「我が国における有数の教育都市」「東北地方の学都」と記し、「学都」を高等教育機関から児童幼稚教育機関（四万余人余、仙台総人口の約五分の一）まで完備する「教育都市」と認めていることに、留意したい。しかし、仙台を「我が国唯一の学都」とは呼んでいない。資料④は、港湾協會總會に全国から参加する会員向けの觀光案内書である。「東北の学都」「学都としての仙台」の文言で、東北地方では仙台の高等・中等教育機関の充実ぶりが際だつ特徴であり、「全国各地から此所に笈を負ふものが逐年多きを加へてをる」と述べ、仙台市民もその恩恵をうけ、高等・中等教育機関の充実であると捉える従来からの「学都」観の一つである。資料⑤は、一般市民向け觀光案内書である。仙台市を「消費都市から生産都市」への移行の推移を目ざしていること、「東北地方の中心」「教育機関の完備」する「学都」と記しており、「完備する教育機関」の具体的な内容を記していないが、前書と同様に中等教育機関以上の充実である。資料⑥は、市民向けの教育に関する啓蒙書で、とくに、「学都仙台市」について論じている。この書は、「渋谷市政」「教育五ヶ年計画」とくに「教育研究所の建設」を採り上げたうえで、仙台市民にとって「真の学都とは何か」と、問いかけている。教育研究所の研究対象が仙台市の政治・経済・社会生活で、仙台市民は、これらの研究対象を科学的に研究し、応用すべきであることと、仙台市教育研究所所長及川平治の履歴も紹介している。しかし、この考え方が、どの程度、市民間に普及したものか不明である。土橋は渋谷

のブレインの一人であったと考えるが、まだ確証はない。<sup>(註8)</sup>資料⑦は、郷土教育読本で、日之巻は高等小学校・青年学校普通科・中等学校低学年、月之巻は青年学校本科・中等学校高学年を対象に編纂・出版され、編纂委員長は小倉博である。「学都仙台」の教育機関の中樞が初等・中等・高等教育機関で、高等教育機関の完備のみが「学都」の内実でないとの捉え方をしている。「産業経済上から眺めると、他の大都市に比較して著しく遜色」する点にも触れ、大正期以来の「仙台」を意味づける典型的な捉え方の一つである。郷土誌教育の第一人者である小倉と宮城県教育会や後に示す仙台市教育会の記述・出版は、地域に一定の影響を与えたと考える。



(写真10)

『宮城教育』(461号 仙山教育提携号)

現存する資料の中でも、昭和前期の県内における「学都」観の概観を把握するのに格好な論文集は、『宮城教育』（仙山教育提携号 宮城県教育会 一九三七）であろう。教育上から鉄道仙山線開通の意義を論じた特集号で、これまで引用されていない当時の「学都」観の概容が確認できる。とくに、つぎの四人の論述から「学都」としての仙台の捉え方の差異をある程度把握できる。

すなわち、①宮城県教育会長（宮城県知事）菊山嘉男は、「由来、仙台市は学都を以て任じ、東北文化の中心として自他共に許してあるのであるが、交通上の障碍により、山形秋田等所謂裏日本に当る諸県に対しては、余りはかばかしき交渉が行はれず、（中略）然るに此の度の開通に依つて、此の障碍は一掃せられ、彼我的交通頻繁を加ふるに及び（中略）学都仙台を利用する山形の歡喜、まさに思ふべきである」と述べ、②宮城県師範学校長萱場今朝吉は、「私は、大正の初、青森県に奉職して居て、数々山形県の教育を視察した。其頃地方教育の盛な所は、各府県中で西には福岡、中部では長野、東北では山形と称せられ、（中略）勿論我等にもそれぞれの長所美点がある。地方民風にも教育上にも自信を持つて居る。此度仙山線開通して、両県民直接に交通し接触して、長短相補ひ有無相通じて相互に裨益する所あらば、両県の發達の為によろしいのみならず、東北振興の爲にも、其影響の大なること測り知るべからざる事であらう」と述べている。③宮城県女子師範学校長丹澤美助は、「由来、山形県は東北に於ける「教育県」として自他共に之を許し、又我が宮城県は学都仙台を初めとして『東北文化の中心』を以て自ら任じ

てゐる。故に若し此の両県が互に緊密に結合して文化建設に努力せ  
んか、真に恐る可きものあらんとは皆一致する所の見解である。(中  
略)然り我方は教育県山形の卓越性と学都仙台を中心とする宮城県  
の特徴とが、茲に交通上の一新紀元と共に抱合接触して東北の教育  
史上、文化史上に意義ある一頁を印すべきを熱望し且つ期待して希  
望と喜びとを禁じ得ざるものがある」と述べている。さらに、(三)宮  
城県図書館長菊地勝之助は、「仙台市は学都として全国的に著名で  
あるが、事実上果して東北文化―教育の一大中心をなしてゐること  
であらうか、言ふまでもなく学校の種類や其の数の多いことは事実  
であるが、それが直ちに学都たるの条件とはならない。(中略)然  
るに遺憾ながら過去に於ける学都仙台は事実上、教育そのものに於て  
さへも東北各県並に各東北都市の一大中心となつて之を導き、之を  
引付けるだけの実力と態度とを有たなかつたのである。詰り学校都  
市で教育都市でなかつたのである」と述べている。

すなわち、(一)内務官僚である宮城県知事菊山嘉男の「学都仙台」  
観にみられるように、「学都仙台」の呼称に内在する、東北地方の  
地方都市に対する優越性の誇示や喧伝を表現する捉えかたが、宮城  
県内の一部に存在していたことは事実であろう。また、「学都仙台  
を利用する山形の歓喜、まさに思ふべきである」との考えかたの存  
在も少数派であるうが、認めざるを得ない。(四)しかし、宮城県師範  
学校長萱場今朝吉が、山形との交流を「学都」の文言を用いずに論  
じ、仙台が「学都」と呼称することは、仙台市が教育への取り組み  
で他都市に優越していることの表明でないとの認識(地域には地域

の教育が存在すること)に基づく配慮があつたと読みとれる。(五)宮  
城県女子師範学校長丹澤今朝吉の論述は、各都道府県・市町村の教  
育実践の独自性を認め、評価する立場からの「学都仙台」観が確認  
できる。内務官僚である宮城県知事の「学都」観との違いは明白で  
ある。(六)宮城県図書館長菊地勝之助は、「学都仙台」について「学  
校都市」「教育都市」の文言を使い、都市論として論じ、「仙台市は  
学都として全国的に著名であるが、その実態は学都としての条件を  
満たしてはいない」と厳しく批判している。

この論文集では、「学都仙台」に関する捉え方で、教育の多様性  
を明確に把握でき、また、同一地域(宮城県・仙台市)においても、  
異なる「学都」観が存在していたことを重視したい。とくに、菊地  
が土橋信一と同様に「学都仙台」を都市論(学校都市論・教育都市  
論)として論じ、後述する渋谷市政の「学都仙台」建設(仙台市教  
育研究所の設立を含む)への取り組みを評価している点に注目した  
い。仙台は「学校都市で、教育都市ではなかつた」との指摘は的を  
得ている。

#### 八、『仙臺市会会議録』・『仙臺市公報』にみる「学都」

仙台市長洪谷徳三郎<sup>(註9)</sup>や行政担当者が、仙台市民向けに「学都」の  
文言を使い始めた時期は明確に把握できていない。一九三三年(昭  
和八)発刊の『昭和六年 仙臺市統計書』(仙台市役所)が、総説  
で「本市は東北の学都と称せらるゝ如く学芸の淵藪地なるを以て最  
高学府を始めとし各種学校を網羅し文教の燦然異彩を放てり」と記



し、小学校・高等女学校・中学校・実業学校・専門学校・大学について、具体的に各種の学校数・教員数・児童生徒学生数を挙げている。「学都」の意味づけは、「高等・中等教育機関の充実している都市」ではなく、「初等教育機関から高等教育機関まで各種学校が充実している都市」との捉え方である。<sup>(註10)</sup>しかし、昭和前期に発行された『仙臺市事務報告書並財産表』は、いずれも「学都」の文言を使用しておらず、理由は不明である。把握している資料は『仙臺市会議事録』と『仙臺市公報』<sup>(註11)</sup>（以下「仙臺」を「仙台」と記す場合がある）の記載である。

① 『仙臺市会議録』に見る「学都」

昭和前期の仙台市会で、市長・行政担当者や市会議員が「学都」「学都仙台」の呼称を用いて発言した事例は多くない。とくに仙台市長や助役の使用例は少なく、使い分けについても慎重であったと思われる。

仙台市会議録で「学都」の文言を確認できるのは、一九二八年（昭和三）一〇月の市会が初めて、御大典記念事業として郷土博物館建設の建議を審議した時、一議員が「博物館ノ如キモ現下思想混乱ノ上ヨリ見ルモ亦学都トシテノ仙台ヨリ見ルモ適切ナル計画デアリマス」と発言している。以下、使用事例をすべて挙げてみる。

① 一九三三年（昭和八）一〇月三〇日の市会で、仙台市東八番丁と付近の乙種料理店営業者移転について請願する審議で、一議員が「仙台市ガ市長初メ学都デアル 教育都市デアルト云フコ

トヲ屢々言ツテ居ラレマスガ 風紀上カラ見マシテモ何トカ出来ルコトナラバ 市ガ斡旋シテ比較的教育風致ニ関係ノナイ所ヘ持ツテ行ツテ営業ヲシテ貰フヤウニシタ方ガ宜カラウ」と発言している。

② 一九三八年（昭和一三）二月一七日の市会で、一議員が「今日ノ仙台市ト云フモノハ何ト申シマシテモ一大飛躍発展ノ時期デヤナイカ 仙台ハ曾ツテ学都ヲ以テ誇ツテ居ツタ 消費都市ヲ以テ甘ジナケレバナラナカッタ」然シ今日ノ仙台市トイフモノハ従来資本主義文明カラ非常ニ遠ザカッタ 東方ノ地ガ今東北振興ノ波ニ乗ツテ（中略）資本主義工業ガ今東北ノ地ニ勃興シヤウ 此ノ波ニ乗ツテ 従来学都デ甘ジタ仙台ガ一大飛躍ヲ遂ゲナケレバナラナイ重要ナ時期ニ逢着シテ居ル 若シ今因循姑息シテ仙台ガ大仙台建設ノ方針ヲ失フナラバ 将来ニ於イテ消費都市仙台ヲ以テ甘ジナケレバナラナイコロノ結果ニナルノヂヤナイカ」と問い、答弁に立った助役は、「産業都市ニモツテユクガ爲ニ根本問題として教育問題ノゴトキハモット多ク考ヘナケレバナリマセヌ」と確認したうえで、「仙台市ヲ産業都市ニ拵へ上ゲル云フコト 工業都市ニ拵エ上ゲルト云フコト ソシテ又教育大都市ニ拵エ上ゲテ行フ 各種ノ方面ニ於テ最モ優良ナル都市ニ他ノ都市ト肩ヲ並ベテスマセル」と答弁している。

③ 同年三月十一日の市会で、一議員が、高等小学校の月謝値下げについて「我ガ学都仙台市而シテ市長ハ教育市長デアリマス。

此ノ学都ニ於イテ而シテ教育市長ノ下ニ於イテ女子工業学校ノ新設ヲ当局ニ計画ヲ才願ヒシタイ」と発言している。

③また、翌々年一月二八日の市会で、渋谷市長は「全国教育関係大会ヲ本市ニ開催スル予定デアリマシテ、コノ機会ニ於キマシテ学都仙台トシテノ教育文化ノ実情ヲシタシク紹介シ、本市ノ発展ニ資シタイト存ジマス」と述べている。

④さらに、一九四二年（昭和一七）二月二三日の市会で、一議員が「最も大切ナ教育ガ総務部ノ下ニアルト云フコトハ学都仙台ノ立場カラ言ツテ、而モ教育市長トシテ自他共ニ任ジテ居ル市長ガ余リニ組織ニ就イテ意ヲ注ガナカツタコトヲ遺憾トス」と発言している。

⑤注目すべきは、同年九月二六日の市会で、今村武志新市長が着任挨拶で「仙台市ハ申スマデモナク言ハバ東北ノ首都デアリマシテ、東北ニ於ケル政治経済、文化ノ中心地トシテ年ト共ニ其ノ発展ヲ遂ゲテ参リマシタ。（中略）本市ハ夙ニ学都トシテ全国ニソノ名噴々タルモノガアルノデアリマスガ、近時更ニ産業ニ将又工業ニ著シキ躍進ヲ来シツツアリマスコトハ、誠ニ御同慶ニ堪ヘヌトコロデアリマス」と紹介している。

これらの資料から、①昭和初期の仙台市会で、仙台市の特性、都市の未来像と大都市建設、教育問題などを論じる時、市会議員や市長や市当局者には、「学都」「学都仙台」の文言使用は欠くことができないとの認識が存在した。しかし、「学都」「学都仙台」の内実は

不鮮明で、質疑に関して同一認識に立って使用していたとは断定できない。⑥同時に仙台が「消費都市」に甘んじていることを意味していた。⑦しかし、「東北振興ノ波」に乗って、「資本主義経済化都市」（産業都市）建設への移行が論議され始め、その中で仙台の「教育大都市」への移行も論じられている。⑧一九三八年（昭和一三）以降も、市会では「学都」「学都仙台」の文言は使用され、「学都仙台」と全国に紹介していた渋谷に代わり、新着任した今村武志市長も、一九四二年（昭和一七）の市会で「本市ハ夙ニ学都トシテ全国ニソノ名噴々タルモノガアル」と、最初に仙台を「学都」と公言をしている点に留意すべきである。

## ② 『仙臺市公報』に見る「学都」

仙台市政上で、「学都」「学都仙台」の文言が多く記録し残されているのは、一九三五年（昭和一〇）四月に創刊された『仙臺市公報』である。<sup>（註1）</sup>紹介される市長や行政担当者の「学都」観をある程度把握できる。具体的に見てみよう。

①『仙臺市公報』（昭和一一・一一・一一）は、渋谷市長の年頭所感を「本市ノ現状ニ鑑ミ将来ニ想到致シマスルトキニ、学都仙臺ノ充実ハ更ナリ。産業都市ノ建設、観光施設ノ整備、社会事業ノ普及徹底、衛生及医療施設ノ拡充、都市計画ノ遂行等或ハ事業施行ノ半ナルモノアリ、或ハ施設計画中ニ属スルモノアリ、各般ノ事業施設ガ山積シテ居リマス」と報じている。

②同（昭和一一・一一・一五）によれば、渋谷市長は仙台市職員に

対する年始挨拶で「仙台市政に関する方針は、昭和五年の市長就任以来、声明しているように、市政の改善刷新を図ると共に喫緊なる諸般の施設を遂行し、我が仙台市の近代都市として形態と内容との整備を図り、市勢の進展と市民の福利増進とに努め以て躍進大仙台の実現を期せんとするにあつた」と述べている。

⑧同（昭和一一・二・一）は、「仙台市ハ東北ノ学都トシテ教育学芸ニ関スル諸般ノ施設概ネソナハレルモ、未ダ動物園ノ如キ観覽施設ナク、教育参考資料上著シク不便ナリシノミナラズ、地方文化発展ノ為ニモ遺憾ノ点ガ尠ナクナカツタノデアリマシタガ、時代ノ推移ニ伴ヒ動物園建設ノ議ガ起コリ、市会ノ協賛ヲ得マシタノデ昭和十年度ニ建設スルコトナリ」と報じ、

⑨同（昭和一一・一二・一五）は、都市計画の方針を紹介するなかで「仙台市ハ曩ニ動物園ノ設置ヲ見タルモ、イマダ市民ニ開放セラルベキ植物園ナキハ、学都トシテ自然科学ノ教育上最モ遺憾トス所ナリ」と述べ、

⑩同（昭和一二・一一・一）は、仙台市内の各学校の学校医、学校歯科医、学校（院）長、学校衛生関係者によって仙台学校衛生会が組織され、渋谷市長は「女学校、中学校、高等学校、大学と進学するに従て其の健康状態に注意を要することが必要なのに、仙台市は学都と誇称しながら之が連絡統一する機関の無かつた事を遺憾として居りましたが、仙台市学校衛生会が設立せられた事は、学生、生徒、児童の保健衛生上誠に喜ば

しい事である」と述べている。<sup>(註13)</sup>

⑪同（昭和一三・五・一）は、市制実施五十周年に際して、渋谷市長が「爾来行政、交通、通信、教育、経済に関する諸機関が相踵いで設置せられ、所謂北日本の中心都市たるに至つたのである。殊に教育機関の完備は国稀に見る所であつて、東北の学都として自他共に之を許す位置にあることは更めて言ふ迄もない所である。（中略）又本市には最高学府たる帝国大学を含め官公市立多数の学校を有し、所謂東北の学都と称せられてゐるけれども、現実に課題は多い（中略）国運の伸展、市勢の発展の根本要素は之を国民教育の充実に俟たねばならぬ。（中略）昭和七年之が根本的調査を行ひ、其の対策を樹立したのが所謂五ヶ年計画である。之は独り設備の完成のみを企画したものでなく忠良なる国民養成と共に実に善良なる市民たるの基礎を作り、産業教育を施し、更に市民体位の増進を企画する等其の内容充実を策し、本市をして文化的産業都市たらしむべき基礎教育の徹底を期したものである。とくに、昭和一一年教育研究所を新設して地方の状況を實際に就き調査研究し、以て教育をして市の実情に即せしめ適切なる教育の実施を期して居る次第である」と語っている。

⑫同（昭和一四・五・一）は、仙台で開催された市制実施五十周年全国市会議長会議で、渋谷市長は「我が仙台は、近年に至り東北振興の国家的輿論と相俟つて市勢の発展も漸くその軌道に乗り、今日におきましては、北日本に於ける政治、教育、産業

文化の中心地として躍進を続けるに至りました。本市は学都仙台の名があり、教育機関は比較的完備されてあります」と紹介し、  
④同（昭和一四・一二・一五）は、「臨戦体制一億一心凡ての事業を統合して外敵に備へんとするに至り、学都の仙台は率先して市内近距離に通学する中女学生の徒歩を奨励し電車バスの利用を制限しました」と報じ、

①同（昭和一五・六・一五・）では、市勢講習会<sup>(註14)</sup>における渋谷市長の講演を「由来我が仙台市は東北の学都と称せられて居りまして、官公市立の中等学校、専門学校及大学等殆んど教育機関が整備して居りますので、将来倍々学都仙台の名をして名実共に文教の中心都市たらしむることに努力することが肝要であると信じます」と伝えている。

これらの資料の特徴は、①「学都の充実」「大仙台実現」など、近代都市・仙台として将来の形態と内容を検討する中で「学都」を具体的に論議している。②このことは、同時に「学都仙台」に基づく市政方針の具体的な実現の検討でもあった。③しかし、「北日本の中心都市」「教育機関の完備」「東北の学都」と呼称し、「自他共に許す位置にある」「国稀に見る所」（全国唯一ではない）として評価する仙台に異存はなかったが、④その「学都」には「遺憾ノ点」（東北の学都と称せられてゐるけれど、現実課題が多い）が存在すること、⑤その解決のためには、「国民教育の充実」（「忠良なる国民養成とともに実に善良なる国民・市民の基礎養成」）に俟たねば

ならぬ」と指摘し、⑥渋谷市政では当初から、具体的に教育の五年計画と仙台市教育研究所の新設<sup>(註15)</sup>を挙げ、⑦「東北振興の国家的輿論<sup>(註16)</sup>と相俟って実現したいと述べている。以上、記録に残っている当時の仙台と「学都」「学都仙台」の呼称の使用状況を考慮すると、従来の指摘が不正確で不明確であったことがわかる。

## (二) 「仙臺市民歌」と「学都」

一八九八年（明治三一）の京都市歌を皮切りに、「市民歌（市歌）」がつくられ始めたといわれるが、その定義づけは不明確である。市民歌制定の契機は、市制制定や市制〇周年記念が多数を占め、次いで市町村合併による新市誕生で、とくに昭和前期に作成・制定された。本格的になったのは昭和初期からといってよい。とくに、公募作品の歌詞に、応募した市民の都市観が窺えて興味深く、歌詞内容を検討すると、その特徴を把握できる。市民歌は、市の公募や地元新聞社の公募入選作がほとんどである。しかし、市民や児童が、どのような場で、どのように歌ったのか、その普及については把握できていない。<sup>(註17)</sup>

昭和前期に、仙台市民に親しまれ歌われた「仙台音頭」「ミス仙台」に関して、武田篤志氏や石澤友隆氏などの研究によって明らかにされている。<sup>(註18)</sup>しかし、それらの歌詞には「学都」の文言は確認できない。『要説 宮城の郷土誌』（仙台市民図書館編 一九八三）は、仙台市民に歌われた仙台音頭の歌詞に「森の都よ 学都の都 東北文化のこの都」と「学都」の呼称が謳い込められていると記してい

るが、誤記と考える。一九三三年（昭和八）発行の『宮城縣案内』（港湾協会第六回通常総会宮城準備委員会・代表鈴木清兵衛）は、仙台音頭の歌詞を「青葉城 森の都よ 学徒の都 東北文化の此の都」と掲載しており、「学都の都」は「学徒の都」の同音による誤記であろう。<sup>(註19)</sup> また、「学都」の歌詞を有する校歌の存在も、確認されている数は少ない。<sup>(註20)</sup>

河北新報社は、一九三一年（昭和六）三月「東北の誇り、東北の中心、翠深き杜の都は悠々二十万の人口を擁して大仙台建設の途上に立つてゐる（中略）われ等の胸は歓びの歌声で高鳴つてゐる、此の力、此の希望、この歓び、われらは今声高らかにうたふ歌がほしい。歌詞は是非とも諸君がうたひ出たる者の中から選ばねばならぬ」と要求し、作曲は堀内敬三、作詞審査は堀内敬三・土井晩翠・小宮豊隆と決定した。歌詞の募集規定に「士気を鼓舞せしめ、郷土の誇りを自覚せしむるに足るもの、難解の字句を避け、明朗にして相当近代性を持つもの」との条件をつけて公募し（三千の応募から四四篇を予選し、九編に絞る）、最終的に決定したのは、一等が佐々木青（佐々木精一 齋藤報恩会博物館勤務）の市民歌である。歌詞に「学都」の文言はなかったが、「森（杜）の都」のイメージで一番から四番まで謳われ、「北方の 春はめざめて 産業と 文化の都会 基成りぬ 仙臺市」の歌詞は、市民歌募集の趣旨に応えたものであろう。しかし、二等入賞の石川左京（仙台出身の詩人・石川善助）が「絵巻を擴げる 緑の都 木間に波うつ 家並の起伏 自然の恵みに いそしむ心に 気高き理想の 文化芽生ん 聖なる學

都よ お、わが仙臺」と、仙台を明確に「聖なる學都」と歌い、「市民の生活」「緑の都」「明るき市政」「栄えよ商工」と記していることに注目したい。また、三等の一人が一番から三番の冒頭で「都仙臺」を歌いこんでいること、もう一人が「伸びよ學びの我が都」「築け文化の我が都」「杜の都の偉業成りて」と歌っている。仙台市民歌の一・二等の歌詞は、図1の通りである。

●仙臺市民歌（二人入選）

（佐々木青作詞・堀内敬三作曲）

一、青葉山 雲湧く所

東奥の 覇権は成りて

榮光と 威武の大旆

高かりき 五城樓

二、廣瀬川 霧はれ行けば

北方の 春はめざめて

産業と 文化の都會

基成りぬ 仙臺市

三、三百の 春秋去りて

山河の 色は移らず

伝統の 血潮高くも

脈搏つよ 我が胸に

四、光明の 時代ぞ今は

空青く 望み遙けし

新らしき 鵬翼ならせ

高らかに 朗らかに

（二人入選）

（石川左京作詞）

一、赫躍く歴史に 思ひは昂まり

明るく脈うつ 市民の生活

和親に溢る、 日夜の平安

正しき伝統を 我等は喜ぶ

藩祖を讀へよ お、わが仙臺

二、絵巻を擴げる 緑の都

木間に波うつ 家並の起伏

自然の恵みに いそしむ心に

気高き理想の 文化芽生ん

聖なる學都よ お、わが仙臺

三、明るき市政に 明るき人々

時代の律動に 血潮を合せて

先駆の誇りに 榮よ商工

若やぎ華やけ 賑はへ町々

希望は東へ お、わが仙臺

（図1）

仙臺市民歌の作品（一・二等入選）



審査について、後日、河北新報社は「大仙台建設の途上にある我等市民にもつともふさはしい勇壮な仙台市民歌」「我等は此の市民歌を高唱しつゝ、商工都市仙台的基礎を築いていきたいと念願」と報じ、その一方で、「余りに仙台市を学都として尊重し過ぎ、或ひは学生歌風の流れ、市民歌として優秀な作品が少なかったのは遺憾に堪へない」との感想も述べている。「余りに仙台市を学都として尊重し過ぎ」と書かれているように、応募した作品には、市民歌を「学都」仙台のイメージで作詞した作品が多かったと推測できる。この点は、仙台市民をはじめとした応募者の純粹な心情として、明確に押さえておく必要があると考える。

同年一〇月九日、河北新報社は、仙台市民歌に歌譜を添えて仙台市に贈呈。仙台市は、各校唱歌主任の練習会、各校全職員の伝習会を行い、とくに近く市民になる尋常六年児童・高等小学校児童や青年団員などに習得させ、その後、公式に市民歌としての発表会を催すことを約束している。また、仙台市役所では、一月三日明治節拝賀式後に市民歌を歌うため、一〇月下旬に練習会を行っている。

さらに、一〇月二八日に仙台市主催の仙台市小学校児童体操大会（全市一九校四年生児童一万四千人が参加）で、連坊小学校五・六年男子による徒手体操マスゲームは、仙台市民歌のリズムに合わせ、演技を見せた。一月一四日、市民歌の発表会が行われ、立町小学校選抜児童がJ O H Kから仙台市民歌を放送している。この市民歌は、終戦時まで広く市民に愛唱されたといわれる。<sup>註21</sup>

渋谷市政のなかで進められた児童を含む市民に向けた市民歌教育

は、どのような成果をあげていたのであらうか。教育現場の実践内容を把握できていないが、授業面では『仙臺市民讀本 全』の活用を確認できる。例えば、次号で詳細を記述する『仙臺市公報』附録「少國民通信」（昭和一六年九月二〇日）では、大合併して誕生した新仙台に関する児童（仙台少國民）の感想文で、「青葉山雲湧く所……」と思はず市民歌が口をついて出る。（中略）風光と文化に恵まれた森の都に健やかに育つた私達が、今日から大仙台市民として輝かしい、力強い第一歩を踏出すことになった」（八軒小路国民学校高等科二年女）と記しているように、資料収集は不十分であるが、児童への指導がなされていたと考えられる。しかし、仙台市民歌の歌詞には、「学都」の文言はなく、児童の言葉のように「学都」なしの「森の都」仙台であった可能性も残る。今後の教育現場や市民の取り組みの具体的な掘り起しが必要であろう。仙台市内の学生・生徒・児童による「学都」の使用例に関する資料は、仙台市民歌を含めて十分に把握できていない。

### (三) 『仙臺市民讀本 全』の編纂と「学都」

#### (1) 郷土誌『仙臺郷土誌 全』『我が仙臺』の編纂

昭和初期、仙台市教育会発行の『仙臺』（小倉博著 大正一三）は、すでに第四版（昭和六年版）を公にしていたが、一九三三年（昭和八）七月に『仙臺郷土誌 全』（仙台市教育会編 昭和八）<sup>註22</sup>が刊行された。すでに、一九二八年（昭和三）一〇月に仙台市教育会は、仙台郷土誌の編纂を小倉博に委嘱し、一九三一年八月草案を仮印刷

し報告していたが、編纂進行中に市長の交替（山口龍之助から渋谷徳三郎<sup>註24</sup>）があり、それにとまなう情勢の変化のために、仙台市役所各課長の意見を取り入れ修正・脱稿し、市民向けに発行されたと推測できる。

『仙臺郷土誌 全』は、「学都」に関して「明治維新後、東北の中心たるべき官衙学校が頻に設けられたから、市は官吏学生の都となり、商工業は今日に至るまで甚だ振るはない。畢竟仙台は森の都として学都を以て立つのがその運命であらう」「行政・教育・経済に関する諸機関が相次いで設置され、仙台市は所謂北日本の中心点となるに至つた。東北日本に於ける文教の府・学都として自他共に許す位置にあるが、商工都市としての仙台市は発生活革に於て詳述した事情からして尚これを将来に待たねばならぬ現状にある」と述べ、「学都」の意味づけは何故か曖昧になっている。当然、「学都」の論議がなされたと考えるが、明記されていない。

『我が仙臺』（仙台市教育会 昭和八）が発行されたのは、『仙臺郷土誌 全』発行の約三週間後である。はしがきで「本書は、仙台市小学校尋常科児童のために仙台市の地理歴史の概要を知らしめようととして編纂した郷土教育の課外読物で、尋常五年地理教授前に基<sup>註25</sup>本地理の教授や一般地理歴史終了後に使用して大局から我が仙台を学習せしめるのも望ましいこと、大方の叱正によつて増補訂正を欲する」と述べている。なお、一九四二年（昭和一七）八版改訂版のはしがきによれば、本書は小倉博・石川謙吾に委嘱し編纂している。

この書は、表紙に次いで「仙台市民歌」を掲載している点が、従

来の郷土誌と大きく変わった特徴である。これ以降、仙台市と仙台市民歌は、不離一体性のもとなつていった。

『我が仙臺』の冒頭・第一区域では、「東北第一の都会といはれる我が仙台市」を「森の都」の見出しで、「市街地でも樹木が多くて天然の公園の如く至つて住み心地がよいので森の都といふ名を以つてよばれることがある」と記し、「官公署・学校」では「学校」「学都」の二つの小見出しで、「仙台市は商工業の都市としては未だ充分でないが、多くの学校・官衙・兵營等があつて、我が国に於ける有数な教育都市政治軍事の中心都市<sup>註26</sup>になつてゐる。学校には東北帝国大学・第二高等学校・仙台高等工業学校等の官立学校はじめ、女子専門学校・師範学校・中学校・高等女学校・商業学校・工業学校等の県市立諸学校及び多数の小学校がある。その他私立の専門学校並びに中等学校も多く、幼稚園もあつて教育の機関はよく完備してゐる。従つてこれ等の諸学校に学んでゐる児童・生徒・学生の総数は四万余人に達し、市の総人口の五分の一以上を占めてゐる。仙台市が学都と呼ばれるのも当然のことである」と記している。小倉博が『仙臺』で記した「学都」の捉え方がそのまま論じられ、変化は認められない。しかし、この書を用いた「仙台市民歌」の現場指導で、子どもたちは、仙台について具体的にどのように学習していたのであろうか。

(2) 二種類あつた『仙臺市民讀本』

仙台市内の小学校の教育現場で活用された郷土讀本『我が仙臺』

に先んじて、小学校高等科児童を対象とした「仙台市民読本」の名  
称で編纂・出版された最初の郷土読本が存在する。副読本『仙臺市  
民讀本』(仙台市五橋高等小学校 昭和八年五月)である。<sup>(註27)</sup>

緒言の前頁に、「仙臺市民歌」を仙台市全景写真とともに掲載し、  
緒言で「我仙台市には古来幾多の誇りがある。殊に最近の發展振  
りに於て実に目ざましいものがある。併し静かに内省するとき、欠  
陥の甚だ多いのに驚かされるであらう。吾々は、美点は益々之を發揚  
し、欠点は飽くまで之を矯正し、名実共に真の大仙台市を建設せね  
ばならない。是れ二十万人市民の連帯責任である。(中略)本校は  
年々在校児童の約半数づつを社会に送り出すのであるが、真に仙台  
市民としての自覚を持つて此の校門を出る者果して幾人あるであら  
うか」と、本書の編纂目的の理由を示し、前編は高等科一学年に、  
後編は高等科二学年に配当し、各々約二十時間を予定した課外学習  
で取扱っている。また、「本書編纂に当り、市の市勢講習会<sup>(註28)</sup>に負ふ  
ところ極めて多い」と特記していることに留意したい。

前編第二課「仙台小史」で、「明治四年青葉城に東北鎮台が置か  
れてより剛健なる第二師団の武勲は年と共に軍都仙台の面目をほど  
こし、年一年と完備しゆく教育機関の充実は自然の恩恵と相俟つて  
学都仙台の名にそむかない」と、「軍都仙台の面目」と「学都仙台  
の名」で、とくに「軍事仙台と学都仙台」の両者で特記している点  
が目につく。

後編の第一課は「学都仙台」である。「大学園<sup>(註29)</sup>」の見出しで「東  
北の学都仙台は実に大きな一つの学園である。大学より幼稚園に至

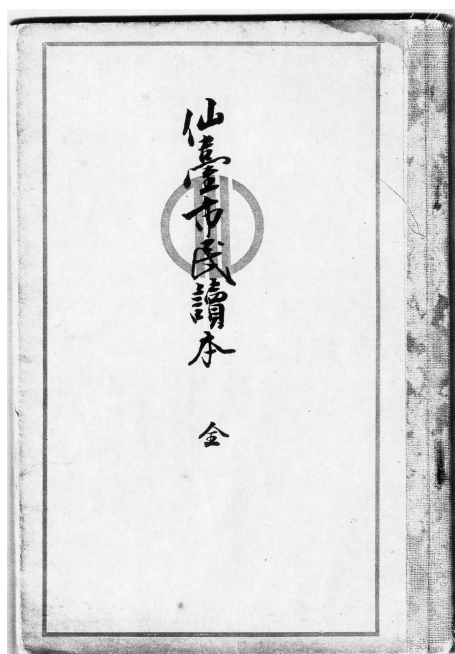
るまで其の数を合すれば実に百余の学校を持つてゐるのである。今  
官立県立市立私立に分けて学校数をあげれば次の通りである。(中  
略)其の学生生徒児童の総数は約四万七千、教員数は約二千で、学  
校に学びつつある青少年が全市民二十万の四分の一を占めて居る。  
学都仙台と言はれるのも又偶然ではない」と記し、さらに「学都仙  
台の市民として」の見出しで、「学都仙台の市民として特に留意す  
べきは学生に対する態度である。他地方から学生を仙台に学ばして  
ある父兄に少しの心配もかけさせぬやうに、学生自身亦愉快に専心  
学問に精進し得る様に市民一般心掛けねばならない」と述べてい  
る。しかし、「学都仙台を名実とともに欠ける所のない立派な学び  
の園としたい」と指摘された時、教育現場では、その具体策を論議  
し、取り組んだのであろうか。

第二課が「軍都仙台」である。冒頭「満蒙事変によつて世界的に  
威光を輝いた第二師団を持つ我が仙台は、軍都仙台とも言ひ得るで  
あらう。(中略)将来帝国軍人として立つべき吾等がかかる名誉あ  
る師団を我仙台に持つてゐることは無上の光栄と云ふべきである」  
と記し、軍都仙台に関する記述は、本稿では全文引用を避けたが、  
二頁に及んでいる。

第十四課は「良き仙台市民」である。「我等は何の為に学ぶか。  
言ふまでもなく国家有用の材となり 上陛下の御慈悲に対し、同時  
に我等を養育せる郷土の恩恵に報い、益々善美なる国家、都市を建  
設せんが為である。斯く考へる時良き国家人は常に良き市民でなけ  
ればならぬ。我等仙台市に住居するものは如何にして良き仙台市民

となるか。昭和八年三月卒業児童祝賀会に於て仙台市長洪谷徳三郎氏は次の如き自治訓話をなされてゐる。一、吾等の仙台市を愛し益々其の繁栄を図りませう。一、教育を振興し我等の仙台市を立派な文化の都市に致しませう。一、産業の発達を図り我等の仙台市を生産の都市たらしむるに努めませう。（中略）」と、洪谷市長名を具体的に挙げ、「我等市民活動の根拠と方向とを明示された」と述べ、「仙台市は我等の都市である。それ故に我等相互の協同により真に文化都市の名に背かぬ都会とせねばならない。（中略）市民は地方自治の本義を理解し権利に驕らず、責任を忘れず、あくまで義務を完了するよう努力する時、必ずや我等の仙台市の前途は輝かしいであらう」と記している。

約二年後に出版された『仙臺市民讀本 全』（仙台市教育会 昭和一〇年二月）は、はしがきで「本書は、仙台市小学校高等科児童の為に、仙台市の地理・歴史の概要、市勢の概要、並に公民としての心得などを知らしめ、仙台市を理解し、愛市中心を涵養して仙台市将来の伸展を期する趣旨で編纂したもの」「仙台市教育会が仙台市小学校尋常科児童用として出版した「我が仙台」の学習の上に立つて使用する高等科児童の課外読物で」「仙台の市民としての自覚と責務とを力説高調し、将来の仙台市民としての覚悟を培ふことを要望する」と記している。編纂には五橋高等小学校と仙台市役所各課が協力し、執筆・添削者は小倉博、石川謙吾ほか六名である。本書が五橋高等小学校の『仙臺市民讀本』を下地に作成されたことは明白であった。



(写真12)

『仙臺市民讀本 全』（仙台市教育会）



(写真11)

『仙臺市民讀本』（仙台市五橋高等小学校）



『仙臺市民讀本』（五橋高等小学校）と『仙臺市民讀本 全』（仙臺市教育会）の内容では、仙臺市教育会が出版した市民讀本に一部で加除・修正はあるが、五橋高小等学校の市民讀本と基本的に同一の記述内容である。

しかし、『仙臺市民讀本 全』（仙臺市教育会）では、後編の目次から「軍都仙台」が完全に削除されている。「軍都仙台」に関する記述では、「史蹟名勝」項目で「宮城野原は、往昔の光景を偲ぶことも出来ないが、軍都仙台にはふさはしい大練兵場になつてゐる」とのみ記され、約二頁に及んだ『仙臺市民讀本』（五橋高等小学校）の「軍都仙台<sup>(註36)</sup>」の詳細な記述部分は取り入れられていない。第三課官衙・兵營では、小見出し「仙台と官衙兵營」の中で、「仙臺市は其の發生的原因からして、商工業都市としては余り振つてゐないが、明治維新後新しい政治の中心地となり、師団が置かれて軍事上の要地となり、東北大学が開設されて学都となり、その他多くの官衙・学校が設置されたので、東北地方は勿論全国に於ても、政治・教育・軍事の中心都市として有名になつてゐる。いま市内にある官衙・兵營の主なるものを示せば左の通りである。（中略）荣誉ある青葉師団の膝下にある青年の体格はもつともつと優良でなければならぬ。壮丁教育制度に於いて最も恥づべき事は尋常小学校を卒業しない人が毎年六七十人から百人近くあることである。学都仙台の壮丁としてこんな不名誉なことがあらうか」と、むしろ仙台に関して「学都」と軍事の関わりで述べている。分担制を採っているために、「軍都仙台」の取り上げ方や記述が変化したのか、執筆者によつ

て認識に違いがあり、協議の結果で変化したのか、出版の権限を持つていた市当局の影響はなかったのか、検証が必要である。

「学都仙台」の呼称については、前編の第二課「仙台小史」の明治維新後の記述で「その後各種の官衙・学校が設けられたが、殊に明治四十四年東北帝国大学の開設は仙台をして学都として誇らしめるに至つた」と記し、後編第一課「学都仙台」では、「大学園」と「学都」の二つの小見出しで、「教育の上から見た我が仙台は、実に大きな一つの学園といはれよう。幼稚園から最高学府たる大学に至るまで各種の教育機関の具はつてゐること実に百余、全国稀に見るところである。これに学ぶ学生・生徒・児童の総数は中等学校以上が一万八千、小学校児童が三万一千の多きに上り、教職員の数は二千余で、実に全市民の約四分の一を占めてゐる。全市には至るところに樹木が繁り、他の都市に見られない森の都をなしてゐる。四圍亦閑静、且景勝に富み青年学生にとつては勉学の好適地である。学都仙台といはれるのも偶然ではない」と記している。

さらに、小見出し「学都市民として」を「学都の市民の覚悟」に替え、「学都仙台を名実共に欠ける所のない立派な学びの園としたものである」と述べている。文中の「仙台は気持ちの良い所」を「仙台は落ちつきのあるところ」と修正しているだけで、基本的に変化していない。

従来から呼称されてきた「森（杜）の都仙台」の呼称に関しては、五橋高等学校の讀本では、第十一課「史蹟名勝」の中で、「杜の都の秋、紅葉の名所として第一に屈指するのは、八木山遊園地である」



と記述している（「森（杜）の都」を注意・強調する意味のゴシック体文言ではない）が、仙台市教育会の読本でも、後編第一課「学都仙台」で「森の都」の呼称が確認できるのみで、「仙台は気持ちの良い所」を「仙台は落ちつきのあるところ」と修正しているが、基本的に変化は見られない。従来読本には見られなかった大きな特徴である。

以上見てきたように、基本的には、この時点で「軍都」を絶対視しておらず、前述のように「軍都仙台」を目次から排除している。その記述の様式や分量、写真・図版の違いについては、二書による具体的な検討と確認が必要である。<sup>註31</sup>

### ③ 『仙臺市民讀本 全』誕生の背景

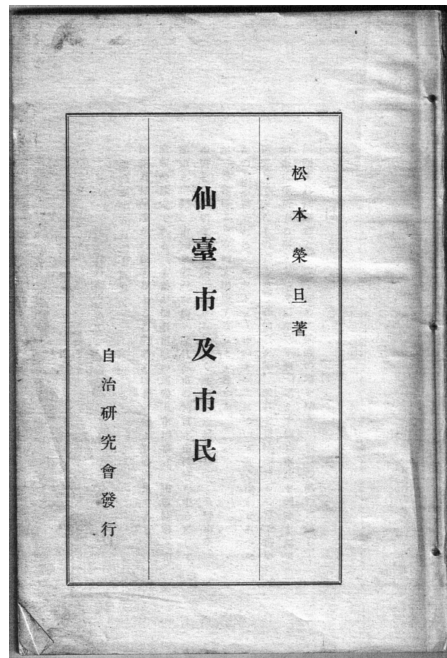
一九三四年（昭和九）の渋谷再選直前に発行された『仙臺市及市民』（松本榮旦 自治研究会 昭和九）については、『重訂 宮城縣郷土史年表』（菊地勝之助 一九七二）が「昭和九年八月二〇日発刊」と記載しており、当時、地域でも注目された出版物の一つであったと考える。松本榮旦の経歴や渋谷との関係は把握できていないが、地方自治論に立って仙台の市政論を述べ、渋谷市政を評価し、具体的な提案もしている。松本が、土橋信一と共に渋谷市政の政治的ブレーンの一人であった可能性は存在する。

すなわち、渋谷市政を「殊に昭和七年八月庶務規程を根底から改革し内部行政組織の変更を為し行政整理を断行した事の如きは、市庁内の空気を一新し、明るい市政への転換であった。（中略）仙台市

に近代都市の精神を發揮せしむべく都市計画事業の実施を行ひ」と評価したうえで、「仙台市の将来を思ふ時、成人に対し自治精神涵養の急務なのは勿論の事として、更に仙台市百年の大計の爲めに、小学校児童の頭に「我が仙台市」なり「自分の市」なりといふ觀念を強く植付ける事が一層大切であらう。（中略）将来の仙台市民たるべき児童に対し、完全なる自治教育を施し、斯くて根本から仙台市の第二の市民を作り上げて、そこに自治の理想を體現せしむる策をとらねばならぬ。仙台市の将来觀と児童の頭に対し「我が仙台市」の觀念を植え付ける事の如何に重大問題なるかを、市民は深く然して靜かに考へねばならないのである。（中略）従つて資料の蒐集も容易でないとは信するが、市行政の首腦である市役所は勿論の事、市の学校の先生も有力者も相協力して仙台市の正確な歴史的沿革を知る事に努むべきである」と提案している。

新しい『仙臺市民讀本 全』（仙台市教育会）の発行は、地理的かつ歴史的観点から近代都市仙台が置かれている政治的、経済的、文化的現実を捉え、仙台市民が新たに依拠すべき共通のあるべき都市像を提供し、さらに、仙台市民（都市市民）として地方自治実践の自覚を促している。しかし、これらの要素が、実際に仙台市民にどの程度受容されたのかは不明で、今後の課題となろうが、渋谷市政に仙台市民讀本の発刊を急がせた理由の一つには、こうした松本榮旦らに代表される仙台市政に対する考え方、すなわち、「将来の仙台市民たるべき児童に対し、完全なる自治教育を施し、斯くて根本から仙台市の第二の市民を作り上げて、そこに自治の理想を體現

せしむる策」が存在していたと考える。



(写真13)

松本榮旦『仙臺市及市民』（個人所蔵）

#### ④ 昭和前期の「学都」の特徴

昭和前期の先行研究では、「学都」の呼称や「学都」観に関して、仙台の「独自性」が無視され、論じられてきたと思われる。勿論、「学都」「学都仙台」に関する概念は、地域において、時代や使用する個人・組織によって絶えず変化し、より具体化・多様化されていると考える。仙台市内における「学都」呼称の実例記録をみると、例えば、在仙卓球実業クラブ名「学都」は、『河北新報』記事で、一九二五年（大正一四）七月以降から昭和初期にかけて確認でき、「学都」の呼称が仙台における別称として市民にある程度認知され

ていたことを窺がわせる。そのほか、一九三九年（昭和一四）八月以降の『河北新報』広告に、「緑樹を以て綴る学都大仙台」住宅別荘地の対象として向山愛国ヶ丘住宅地と北仙台あけぼの住宅地を分譲販売する件がしばしば掲載されている。もちろん、これまで見てきたように、昭和前期の仙台市民間で、「学都」の呼称・使用・記述の普及度が、どの程度であったのか、資料で具体的に把握できていない<sup>(註2)</sup>。今後も調査の時間と対象領域は増えるが、丹念に探し出し、確認する必要がある。

以下、これまでの記述部分と重なるが、昭和前期における「学都」「学都仙台」の呼称・使用・記述に関する特徴をまとめてみる。

①「学都」「学都仙台」を呼称・使用するが、新聞紙上や雑誌では、大正期ほどは「学都」に関する具体的な提言・論議が行われていない。

②「学都」の定義づけは使用者によって統一されず、不正確であるが、地元の教育関係者は、「あらゆる教育機関が備わっていることは全国稀に見る所（全国唯一ではない）」「学都の称ある実に茲に胚芽とす」という大正期以来の教育界の定義づけを使用している。こうした考えは、地域に一定の影響を与えていた。

③昭和前期以降は、「東北」抜きの「学都」「学都仙台」と呼称・表記する傾向が出てきた。とくに、渋谷市政期には、「学都仙台」の使用が増える。ただし、前記のように、仙台を「わが国唯一の学都」ではないと捉えている。

④従来から使用されている「杜（森）の都仙台」の別称として、

「学都」が市民の間で認知されてきた。

⑤仙台が「真の意味の学都であるか」「一般教育（幼児初等教育）に対して理解と熱があるのか」といった問いが生まれている。

その中にあっても、この問いに対する教育関係者を初めとする仙台市民の意識問題（軍国主義的傾向も含め）が存在する。この点も不明確になっている。一つの特徴と課題である。

⑥一般市民むけの啓蒙書や主張の中には、依然として「学都」に内在する仙台の優越性（高等・中等教育機関の存在を含め）と卓越した独自性を強調するものが存在した。

⑦「学都」の意味づけとして、消費都市から生産都市への移行の中で仙台を捉え、「教育都市」指向の指摘も多く出てくる。

⑧「学都仙台」建設の意味づけの一つとして、後述する渋谷市政の「教育五カ年計画」と「仙台教育研究所」の設置と存在に注目する人物が出現し、同時に仙台の「教育都市」論も主張される。この仙台「教育都市」論も深められていない。

⑨また、昭和一〇年代以降は、「東北振興ノ波」にのって、「資本主義経済化都市（産業都市）」建設への移行を強く主張し、その中で仙台の「教育大都市（教育都市）」が論じられている。

⑩基本的には、仙台を「東北の学都」「学都」「学都仙台」と呼称することを「自他共に許す」存在と評価することに異存はなかったが、「遺憾の点（現実の課題）」が多く存在しているとの認識は存在していた。

⑫この時代は「学都」問題だけでなく、都市の根本的なあり方に

いたるまで、さまざまな面で自由な討論がおこなわれていた。

また、教育界の「学都」「学都仙台」論には、「地域には地域の教育が存在」（教育の独自性）が存在し、むしろ、「仙台市は学都としての条件を満たしていない」と批判する者が存在した。

⑬昭和前期の『河北新報』記事以外で、仙台を「学都」の呼称で記載した事例の把握は十分にできていない。しかし、「学都」

「学都仙台」の呼称は、他都市とは異なる特殊な歴史性を有しており、仙台市以外では、異質な意味で使用されていたと考えられる。他都市が「学都」を呼称・使用する根拠と意義づけは、今後の課題である。<sup>(註33)</sup>

仙台における昭和前期の「学都」の特徴で、とくに、仙台市教育会編纂の『仙臺市民讀本 全』の存在に注目したい。仙台を「学都」や「学都仙台」と呼称することがあっても、仙台を「学都」と「大学園」の両呼称で表記することはなかった。この点は極めて珍しい事例である。都市論で仙台の将来を検討した時に、それまで、しばしば使用されてきた「教育都市」仙台について、「大学園」の呼称で、その内実を検討していこうとしていたと考える。しかし、「大学園」の具体的な内容には全く触れていない。また、仙台市民歌詞の制定過程について指導された可能性は少ないと考える。読本使用後の仙台市民（仙台少国民を含む）に、具体的な検討と実践の取り組みを待とうとしたのであろうか。

『仙臺市民讀本 全』表紙では、五橋高等小学校編纂と大きく変

わった部分がある。すなわち、表紙は五橋高等学校の「仙台市役所」（中表紙に伊達家紋の「竹に雀」を使用）から「仙台市紋章」（仙の字を表象したもの）に変更している。読本を使用する仙台の主役は、市役所（行政担当者の象徴）ではなく、近代都市「仙台（仙台市民を含む）」であると考えられる。仙台市政下の仙台市役所、仙台市教育会、教育関係者や教育現場の教員の間で、ある程度は共通認識されていたものを表象する表紙に変更させた」と推測できる。

後述するが、渋谷市政期には、仙台の地域全体を学校や教育に関する課題で考察する動きが存在していた。そのために、仙台市民が地域を学校や教育の現状と課題で考えることに眼を向け始め、自分たちの理屈や感覚で理解できなかった地域に対する愛着や誇り、具体的な取り組みといった当事者意識を持ち始めたと感じる。

「学都」への一定の認識が、主として行政・教育関係者のなかで定着しつつあったことは窺がえるが、具体的に市民の間でどの程度それが受け入れられていたかは、十分に確認できていない。しかし、「学都」「学都仙台」の呼称と使用は、従来の教育用語・政治用語・施政者用語、とくに難解用語ではなくなってきたと考える。

## 註

（註1）仙台の「学都」に関する記事は、『河北新報』以外の記事でも把握できているが、今回は調査の対象外である。例えば、「各府県総選挙の大勢 東北地方 新人の目ざす学都の決戦」（『東京朝日新聞』昭和三年三月）

二・一）で、宮城選挙区（第一区）を「学都」地域と捉え、『東京朝日新聞（宮城版）』（昭和一六・三・七）には「学都に下宿払底 東北大 新学年を迎へる悩み」が掲載されている。今後の調査により「学都」関係資料は増加すると考える。

（註2）中武敏彦論文の明治期の「学都仙台」と渋谷市政期に使用が増大する「学都仙台」の意味づけには、同語ではあるが大きな違いが存在する。比較する場合は使用されている「学都」の違いを明示すべきであろう。明治期の「学都仙台」の呼称と意味づけが、その後使用されない具体的な理由は説明されていない。

（註3）投稿欄「側歴」は「側歴」の誤記である。

（註4）掲載する宮城県の郷土関係資料は、基本的に「仙臺遊覧の枝折」を含めて、宮城県図書館みやぎ資料室所蔵である。

（註5）前掲（本誌第四九号）の「仙臺案内」は「仙山案内」の誤記である。

（註6）「杜の都」に関する具体的な問題点について論じたものは少ない。菊池慶子氏が『杜の都仙台』の成立と変遷―緑地景観と呼称の歴史をたどる―（『仙台都市研究』五号 二〇〇六）で、仙台の景観の特徴とともに、その背後にある都市の現実について述べている。

（註7）現代に入ると、仙台を含めた都市における「学都」の捉え方には、①「金沢市には明治期に全国に五校設置された高等中学校の一つである第四高等中学校が設置され、その後、ものごとを本質まで究める高等教育機関が多数集積してきたことから、「学都」とも呼ばれている」（『まちづくり都市 金沢』山出 保 岩波書店 二〇一八）が存在する。仙台にも同様の捉え方が存在し、「片平の散歩道 金研百年の歩みとともに」（東北大学金属材料研究所編 河北新報出版センター 二〇一六）が「一般に学都と呼ばれるようになったのは、旧制第二高等学校や東北帝国大学、また魯迅が学んだ仙台医学専門学校などの高等教育機関が、明治、大正期に現在東北大学キャンパスがある広瀬川沿いの仙台市片平地区に集中して設けられた頃からであろう。以来、多くの大学や専門学校が市内内外に開かれて、現在の「学都仙台」になった」と記し、『宮城県の百年』（安



孫子 麟 山川出版社 一九九九）も「仙台は軍都とは別に、学都と呼ばれることも多い。これは第二高等学校と東北帝国大学が、仙台に置かれたためである」と述べ、主として在仙の高等教育機関に属する人々の主張が多く、誤解を招きかねない。しかし、すでに「仙台市史3 別篇1」（仙台市役所 一九五〇）が「小学校、中学校、高等学校、大学が明治末期までに出揃って東北の学都として基礎を作った」と明記していることに、注目すべきである。

〔註8〕 土橋信一は「本書が仙台市政の運営上、市理事者、市会議員、市民諸君に何等かの役するところをあらば著者何よりの満足である」と、出版の意図を述べているが、今後、渋谷市政と教育の関係を追究する根拠の一つである。また、『村長十年』（木村匡先生講演集 一九三四）は「渋谷君の最初四年の日月は、市長の本領を達成する準備行為に費されてあつた。渋谷君は自ら仙台学を研究するに費されてあつた」と述べている。渋谷市政には、木村匡の都市論に基く「学都」への関わりが窺がえ、木村も政治的なブレインの一人であつたと考へる。

〔註9〕 昭和前期の仙台市長渋谷徳三郎による仙台市政の特徴や具体策については、基本的に次号で述べるが、必要な個所については本号でも触れている。

〔註10〕 初等教育機関から高等教育機関まで各種学校が存在することを、「学都」の意味づけと主張する考え方は、前号で示したように小倉博に代表される在仙の歴史・教育関係者に多かった。しかし、男女の問題に関しては、ほとんど論議されていない。

〔註11〕 「仙臺市議会議録」は仙台市議会議事録、 「仙臺市公報」は仙台市総務企画局広報課で所有している。

〔註12〕 「河北新報」（昭和四・四・二五）が、「昭和三年度 仙臺市教育会々報」（仙台市教育会 昭和四・九）による報告書の概容を報じている。とくに、注目されるのは仙台市の住みよい点の集計一位が「各種の教育機関が完備している上に、附近に名勝多く子弟教養に最都合よきこと即ち学都たること」と、すでに調査担当者が「学都」の意味

づけを使用している。

〔註13〕 事務所を仙台市役所内に設置し、会長は仙台市長、事務局幹事は仙台市衛生課長で、仙台市の主導的役割は鮮明で、「学都」仙台として、これまで手薄であつた高等・中等教育機関との連携への積極的な取り組みであつた。

〔註14〕 仙台市勢講習会は、一九三一年（昭和六）四月から渋谷徳三郎市長により実施されたもので、新任教員と希望教員のために、市役所各課長を講師として市勢各般の現況について講習を開催し、一九四三年（昭和一八）度まで継続開催している。また、市長は仙台への市民の希望・関心が存在すると考えており、一九三一年（昭和六）五月市庁舎集會室に教育関係者を集めて、「仙台市を真の学都たらしむるに最適切なる施設経営を如何にすべきか」という問題で教育懇談会を開催している。渋谷は市政取り組みの当初から、「学都」について市民に問いかけを行っている。

〔註15〕 渋谷市長の教育施策の柱であつた「教育五カ年計画」と「仙台市教育研究所」については、次号で述べる。

〔註16〕 東北振興運動については、仙台市議会議録を中心に、次号でその概要と関連を説明する。

〔註17〕 『全国都道府県の歌・市の歌』（中山裕一郎監修 東京堂出版 二〇一一） 同書によれば、昭和一〇年代になると、全国各地で市民歌が制定される。その市民歌の歌詞に「〇〇の都」「〇〇都」の呼称が多く見られるが、しかし、各都市が「学都」と呼称していないことに留意すべきである。

〔註18〕 前掲・武田篤志「杜の都・仙台」の場所イメージ変容と流行歌―「ミス仙台」から「青葉城恋唄」へ―、石澤友隆「流行歌」ミス・仙台―郷土・仙台の近現代史散歩―（河北新報出版センター 二〇〇五） 仙台を「学徒の都」の呼称（学都を使用せず）で捉えた事例は少ない。観光客の大阪人が「森の都、学徒の都の感を一層深く致しました。確かに市の各位が叫ばれて居りますやうに産業方面は一歩立ち遅れて居るやうです」と述べている（『仙臺市公報』（昭和四・一



〇・一五〕。

(註20) 昭和前期の仙台市内の小学校校歌で「学都」の歌詞を確認できるのは、小学校一校である。仙台市立南材木町小学校校歌（小倉博作詞、制定時期は明治末から大正初期と伝えられている）の「名もしるき学都の南 日の光ゆたかにうけて いや強くいや美はしく 生ひ立たん学びの庭に とこしへの榮ぞそはん」である（宮城県小学校長会 発足50周年記念誌 五十年の歩み）宮城県小学校長会 一九九七）。

(註21) 『河北新報』（昭和六・五・一七）以降の記事、「宮城県教育百年史 第二巻」。

(註22) 同書で、小倉博は「実に学徒の生活に適した地で、学都の名を空しくしない」「教育機関の具つてあること全国稀に見る所であろう」と記し、「学生生徒の数を中等学校以上一万五六千、小学校児童が二万四千の多きに上る」と修正した以外は、初版の記述と全く同一で、基本的に変化していない。「学都」仙台を単に中等高等教育機関が設置され存在する都市とは捉えておらず、小倉が県下の教育界に与えた影響力は大きかったと考える。「仙臺」初版序文では、仙台市教育会長は、小倉が仙台市教育会の仙台郷土誌編纂委員の一人で、編纂用資料により本書を執筆したことを記している。

(註23) すでに、『仙臺市史 第一巻』（全六巻予定）は一九〇八年（明治四一）八月発行以降中断しており、約一八年後の一九二六年（大正一五）六月に市会議員菊田定郷が、仙台市史編纂の必要性を力説し、小倉博・清水東四郎であった。こうした状況下での小倉博の仙台市民向けの『仙臺市郷土誌 全』の発行であったが、「学都」に関する記述変化の理由は不明である。

(註24) 山口市政期には、議員から「合併後ノ大仙口市ノ教育計画ハ今迄ト全ク事情ヲ異ニスルトイフコトハ勿論デアツテ、是等ノ問題ニ就テ如何ナル計画デアルカ」などと、仙台市の教育問題や根本計画への質問が相次いだ。市当局は明確な答弁を避け続けた（昭和四年二月二〇日 市会会議録）。しかし、渋谷市政期に入ると、仙台市議

会で教育問題の論議が活発となる。当時の市会の動きについては『仙台市史 通史編7 近代2』（仙台市 二〇〇九）を参照されたい。一九三〇年頃から、文部省が推進した「郷土愛を育て愛国心の形成へとつなげていく教化的側面を強くもっていた」官製の郷土教育が推進され、仙台でも実施された。仙台陸軍幼年学校で使用された郷土教育読本『仙臺郷土誌要覧』（一九三八）は、軍関係の学校教育でも郷土教育が行われていたことを示している。使用している教材が仙台を「今や我国有数の学都」と記し、当時、「学都」と呼称・使用することが広く認知されていたことを窺わせ、興味深い。これに対して、後述する仙台教育研究所の取り組みは、より科学的な郷土研究Ⅱ郷土科学の建設で、社会科学的観点から地域のあり方と教育を問い直そうとするものであった。後述する。

(註26) 「我が国に於ける有数な教育都市政治軍事の中心都市」の表現は、教育都市・政治軍事の中心都市の二つに区分して読み取るべきであろう。しかし、小倉の「教育都市」論は具体的には不明である。

(註27) 仙台市五橋高等小学校で編纂・発行された郷土教育副読本。同名の仙台市教育会編纂・発行の『仙臺市民讀本 全』と混同されて、記述内容は、これまで公けにされていない。

(註28) 前掲（註14）を参照。

(註29) 仙台市を「大学園」と呼ぶ事例は、極めて少ない。この部分は小倉の指摘であろう。

(註30) 「軍都仙台」に関しては、本誌（第四九号 註6）参照。一戸富士雄・佐藤雅也・中武敏彦の論文に詳しいが、「軍都仙台」の呼称と渋谷市政に関しては、従来触れられていない。

(註31) 仙台市教育会編纂の市民読本で「軍都仙台」が削除されたことに関しては、全く不明である。しかし、日本の軍国主義的な傾向が強まる中であって、一九三六（昭和一一）一二月、仙台の教育界において、第二高等学校校長阿刀田令造が、自校の学生を保護するために、いわゆる「反軍思想事件」などで軍部の圧力を毅然と退けた行為を記録している（『天は東北 第二高等学校物語』河北新報社 一九七

七)。この事件は、阿刀田を含めた具体的な地域社会の動きと関係があったと思われる。しかし、一般市民の考えや行動については明らかではない。「軍都仙台」の記載削除は、当時であつては珍しいことであつた。「軍都」のイメージが負の意識として扱えられていたのであろうか。今後、明確にしていくべき課題の一つである。

(註32)

『東北帝国大学新聞』(昭和一一・一〇・二六)は「本学四半世紀の発展史は又城下町仙台から近代的学都仙台への飛躍史だ」と掲載しているが、大学生による「学都」の内実は不明である。「近代都市としての仙臺市の再吟味(尚綱女学校高等科生徒の特輯頁)」(『河北新報』昭和八・三・二二)の記事では、「仙台は何と云ても学生の町である。然るに学生に必要な図書館はあの貧弱さ、読みたい本もなければ、借り出しには不便である、あれでは学都として大いに恥づべき事と思ふ、是非何とか考へて欲しいと思ふ。仙台市は仙台市民のものである。さればわれわれ市民は東北随一の近代都市と誇る仙台をわれ等市民の手で改良し完全なるものとしてゆきたいと思ふ」と記している。中等教育機関に学ぶ女学校生徒が、仙台を「学生の町」「学都である」と捉えたうえで、「仙台市は仙台市民のものである」と意識している市民の手で、具体的な問題可決を遂げ、理想的な近代都市建設に取り組むべきであると発言している。また、市民全般の具体的な事例とは必ずしも見れないが、「河北新報」(昭一〇・八・一)によれば、仙台育英中学校父兄会の総会決議で「東北文化の中心として将来学都として当県市が大をなすに至れる所以のもの」との文言を使用している。注目したい。

(註33)

現在、昭和初期の仙台以外の地方都市で「学都」の呼称を確認できるのは、本誌(第四九号)で示したように、広島市のみである。とくに、広島市で開催された新聞協会総会で、「広島市に綜合大学ならびに各高等商業学校を設置し、学都としての内容を充実せんことを期す」(『河北新報』昭和一一・五・二三)と決議しており、当時の仙台以外の地方都市での「学都」の扱え方の一例である。『河北新報』記事による他都市の小見出しの「学都」の使用例としては、一九三

八年(昭和一三)以降で四例を確認できる。すなわち、「学都弘前も桃色喫茶店の続出 酒なし喫茶店 学都弘前浄化の名案」(昭和一三・七・六)、「学都ならびに軍都弘前五万市民の聴覚を集めている弘前放送局」(昭和一四・六・一七)、「盛岡市、一躍学都に。高工誘致に成功するまで 更に薬専の獲得へ」(既設の盛岡高等農林、岩手医専を加へて一挙に学都の出現を見るに至つた)(昭和一四・四・二)、「(岩手県) 宮古町の学都建設計画遅々 県立高等女学校の校舍増築並に講堂移転問題、町としてはこれに重なる中学校設立、水産学校移転改築等の諸問題が山積してをり、学都建設の第一段階に入つて先づその何れを先決すべきかに当局としては相当行悩みの態である」(昭和一四・六・二三)である。盛岡市は高等教育機関の充実による学都の成立を強調し、宮古町は中等教育機関の充実を学都建設と関連付けて論じている。また、弘前を含め、「学都」の意味づけは明確に示されていない。